

## 趣旨説明

探究的な学びが高大にもたらすもの  
～高大連携の「モヤモヤ」に迫る～

長谷川 豊（大学コンソーシアム京都 高大連携推進室長／京都府立大学 公共政策学部 准教授）



長谷川：皆様、おはようございます。23回目を迎えますフォーラムを、なぜこのテーマにしたのかの趣旨を簡潔にお話しできればと思います。実はスライドがたくさんあり、とても10分では見きれないので、こういうことが語られている、話題になっているということをご確認いただければと思います。

（スライド2）今日に至るまで、この数年はこのようなテーマでフォーラムを開催してきました。そして今回、来年の24回、再来年の25回を見通しながら、あえて高大連携の「モヤモヤ」に迫っていきます。探究学習や高大連携がかなり定着し、展開してきているけれども、果たしてこのままでいいのか、この「モヤモヤ」について率直に出し合っ、最後には解消しようと言っているのです。が、「モヤモヤ」が解消できるどころか、さらに広がったり、増えていったりするのではないかと思います。日々の教育実践が必要だし、高大連携、高大接続を続けていく必要があるわけです。まず、そのことを確認したいと思います。

（スライド3、4）まず最初に、2040年を見据えて

現在、中央教育審議会で教育課程の改訂に関する議論が進められています。その中で高等教育との接続改革という形、初等中等教育の改革は高等教育との接続改善との関係を配意しなければいけないとされています。（スライド5）その中で、高等教育ではデジタル分野への学部転換等の取り組みが進められており、理系への予算化も含めて、この間、かなり急速に進んでいる状況が見られます。こうしたことを踏まえながら、初等中等教育段階、とりわけ高校においては、文理横断・文理融合教育の観点が強調されています。（スライド6）その中で、大学についてはすでに今年の2月に『『知の総和』向上の未来像』という答申が出されています。ここでは、高校までで「培われた資質・能力をどのように伸ばしていくか」ということについて、高大接続の視点から大学での学修の在り方の再構築が語られています。

（スライド7、8）2040年には大学進学者数が46万人に減少する状況の中でどうするのかという問題です。京都でも厳しい状況にあることは皆さんもご存じのとおりですが、大学の質の問題、規模の問題、アクセスの問題という点から、この答申は議論をしています。なかでも、文理横断・文理融合教育の観点、あるいは初等中等教育の接続を強化していく必要性が語られているわけです。（スライド9）大学では総合知の創出・活用と文理横断・文理融合教育をより進めていくと述べています。「文理複眼」的な思考

力を養う必要性についても語っています。専門知だけではなく、総合的な知の重要性が強く述べられています。(スライド10)そして、高校段階との接続の強化として、とりわけ高校の「総合的な探究の時間」や「理数探究」の問題発見、課題解決的な学習活動の充実といった学びに変化がある中で、高大接続の視点から、この関係をより強化していく、あるいは見直していくことが必要だということです。

高校までの探究活動は、大学で行われている課題発見や研究の活動と大きく関わりますし、大学関係者も関わりながら小中高の教育プログラムが進められています。研究の魅力を伝えて、興味・関心をどんどん高めていこうという取り組みと同時に、いま求められている、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力、人間性等を総合的に伸ばす観点からも有効だと述べられています。(スライド11、12)さらには高大接続を踏まえた入試、選抜という問題に展開していきます。高等学校段階の文理横断・文理融合教育を推進する方向を明記する、大学に関する答申の中で高校のあり方について言及しています。この点については、高校の理系分野を増やしていくという政策的な動きにもつながってくるわけです。

(スライド13)今年の2月、先ほどの大学に関する中教審答申が出ましたが、同時に高校改革のワーキンググループの「審議まとめ」も出ています。高校関係者はご存じかもしれませんが、大学関係者がどこまで知っているのでしょうか。(スライド14)まとめでは、大学の答申と同様に、高校における探究・文理横断・実践的な学びが強調され、大学との接続改革の推進にも触れられているところです。(スライド15、16)総合的な探究の時間を「教育課程の基軸」に据えとまで、ワーキングのまとめでは述べられています。(スライド17、18)そして、高校における探究活動は、中学校までの探究的な学習とは違って、「より洗練された質の高い」探究であることが強

調されています。「探究の過程が高度化する」こと、「探究が自律的に行われる」ことが求められているのです。

(スライド19、20)とはいえ、高校までにこのような活動を求められ、それが大学での学びにどうつながっていくのでしょうか。この点については、松下(佳代)先生よりお話しいただけるのではないかと思います。大学と連携した探究活動や大学の授業の先取り履修等、またどういった形の大学入試をしていくのか、高校教育のワーキングのまとめであるにも関わらず踏み込んだ言及であり、大学にも向けられています。これは高大接続の方法にも関わる、入試のあり方に関わることになるかと思えます。

(スライド21)つい先日、文部科学省において「高校から大学、大学院まで一貫通貫した人材育成システム改革」に関するタスクフォースが立ち上がりました。まず最初に高校のグランドデザインを描き、そして大学の改革という検討の流れになっていて、(スライド22)高校教育改革のグランドデザインの骨子が11月28日に発表されたところです。高校では「自ら問いを立てる力」など今までやってきていることをさらに進めていくとされるとともに、(スライド23、24)文系人材が余剰である一方で、理系人材が不足していると明確に書かれており、そうした視点から学科見直し等の改革を進めていくとしています。(スライド25)そこには、日本の学術研究において、自然科学領域の傾向が強いですが、「科学の再興」が強調されている点も踏まえておく必要があります。

(スライド26、27、28)2年前の2023年、日本学術会議は、今の高大接続のあり方に大きな課題があると問題提起しました。どのくらいの方がこの報告を読まれたのでしょうか。というのは、報告は高大接続の中でも「教育接続」に着目して検討されており、今回のフォーラムを開催するにあたって議論を重ねるなかで、この報告をしっかりと学び、これからの高大連携・接続のあ

り方をみんなで議論しようではないかと考えた次第です。報告では「教育接続」が強調されています。詳細については松下先生の基調講演に委ねますが、高大接続と高大連携をしっかりと切り分けながら、接続の中でも「教育接続」に焦点化して検討され課題が提示されています。まずこの点をしっかりと学びながら、これからの高大接続・連携のあり方を考えたいと思います。

(スライド29)「総合的な探究の時間」については成果があると言われてはいますが、実際に私たちが実践をしながら、本当のところどうなのかということです。それぞれの学校現場で生徒と向き合いながら実践する中で、生徒はどう変化するのかを考えると、(スライド30)このフォーラムにも何度もご登壇いただいている溝上(慎一)先生は「時間をかけて問いを立てて考える」ことの重要性について述べられています。「そうは言われても……」という部分が皆さんの中にあるのではないのでしょうか。今日はそうした点を出し合おうではありませんか。(スライド31)いろいろな問いや疑問、不満があるだろうと思っています。先ほどのように、「こうあるべきだ」と言われることで済むのかどうか、実際の現場の状況に立ち返って、率直な思いを出し合いながら、次どのように展開していったらいいのか、またここをどのように進めていけばいいのかを共有できればというのが、今日のフォーラムの趣旨であります。

(スライド32)そうはいつでも、「2026年問題」といったリアルな状況がある中で、高大の教育の接続や連携のあり方、入試のあり方をわれわれ自身、高校、大学の教職員がしっかりと考えなければならないところに来ていることを確認しつつ、(スライド33)われわれがいま抱える「モヤモヤ」を解きほぐしていきたい、あるいはもっと増やしていきたい、そしてより良いあり方を考え続ける、そのことを社会にもしっかりと提起をしていく機会になればと考えます。(スライ

ド34)今日は1日、どうぞよろしく願いいたします

スライド 1

**第23回 高大連携教育フォーラム**

**探究的な学びが高大にもたらすもの  
～高大連携の「モヤモヤ」に迫る～**

**趣旨説明**

京都高大連携研究協議会  
大学コンソーシアム京都 高大連携推進室  
長谷川 豊(京都府立大学)

スライド 2

**高大連携教育フォーラム 京都高大連携研究協議会 2003年度～**

- 2022年度(第20回)
  - 2020年代を通じて実現すべき高大連携  
—生徒・学生が『持続可能な社会の創り手』となるために—
- 2023年度(第21回)
  - どうすれば良い問いをデザインできるか  
—高校の探究と大学の研究の共通点を探る—
- 2024年度(第22回)
  - 高校から大学、そして社会へとつながる「学び」を育てる  
～高校生・大学生のキャリア形成・発達の見点から～
- 2025年度(第23回) 2025/12/6
  - 探究的な学びが高大にもたらすもの  
～高大連携の「モヤモヤ」に迫る～

スライド 3

**フォーラム趣旨**

- 急速な少子化や国際情勢の混迷、自然災害の激甚化、デジタル技術の急展開の中で、中央教育審議会は現在、2040年代を見据えた教育課程の基準の検討を進めており、「高等教育との接続改善」への「配慮」も含まれている。

※文部科学大臣による中央教育審議会への諮問(2024年12月)  
「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」

スライド 4

**検討においてどのような前提があるか**

これからの社会  
少子高齢化、多様な価値観の尊重、デジタル技術の急展開、グローバル化、環境問題、持続可能な社会の実現

子供たちにとって重要なこと  
多様な価値観の尊重、持続可能な社会の実現、デジタル技術の活用

現行の学習指導要領が実現しようとしていること  
現行学習指導要領は、「社会に開かれた教育課程」を理念に掲げ、「何が出来るようになるか」を明確化し、「どのように学ぶか」の重要度を強調、「主体的・対話的で深い学び」の観点からの授業改善を示す

質の高い学びの機会と機会に  
学力向上の促進、地域連携、学力差の縮小

子供一人ひとりに目を向けたい見えてきた課題  
多様性を活用し、可能性を開花させる教育の必要性  
～中等教育3人学級における子供の多様性～

1.0人	12.5人	0.8人	3.8人	4.8人
------	-------	------	------	------

これまでのよい部分を継承し、課題を乗り越え、高等教育との接続改善の観点から、教育課程の在り方について検討を進め、新たな時代を拓いていくための在り方を検討する。【初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について(検討のポイント-概要版)】

スライド 5

**どのような論点について検討するのか**

- 1 質の高い学びづくりに貢献する  
方かやすい学習指導要領にするには  
各教科の学習内容の精選、デジタル技術の活用、学習指導要領の精選、デジタル技術の活用、学習指導要領の精選
- 2 多様な子供たちを包摂する、教育課程の柔軟な対応とは  
子供による学びの個性、多様な価値観の尊重、デジタル技術の活用、学習指導要領の精選
- 3 教科等において改訂すべき点は何か  
デジタル技術の活用、学習指導要領の精選、デジタル技術の活用、学習指導要領の精選
- 4 過度な負担を生じせずに履修を実現するには  
デジタル技術の活用、学習指導要領の精選、デジタル技術の活用、学習指導要領の精選

○ 高等教育段階でデジタル・理数分野への学部転換等の取組が進む中、初等中等教育段階における文理横断・文理融合の観点からの改善についてどのように考えるか。

スライド 6

**フォーラム趣旨**

- 他方、高等学校までの探究的な学びの変化を踏まえ、2025年2月の中教審答申※は、培われた資質・能力をどのように伸ばしていくかという高大接続の視点から大学での学修の在り方の再構築を求め、大学入学者選抜の改善を含む接続強化を図るとする。

※中央教育審議会(2025年2月)「我が国の『知の総和』上の未来像～高等教育システムの再構築～(答申)」



スライド 13

令和7年2月  
中教審「高等学校教育の在り方ワーキンググループ 審議まとめ」

スライド 14

1. これからの高等学校の在り方に係る基本的な考え方

中教審  
高校教育  
WG審議  
まとめ  
「概要」

2. 各論点に対する現状・課題認識と具体的方策

3. 社会に開かれた教育課程、探究・文理横断・実践的な学びの推進

スライド 15

「高校教育WG審議まとめ」が語ったこと

はじめに

『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(令和3年1月中央教育審議会答申)においては、これからの高等学校教育の目指すべき姿として、社会の形成に主体的に参画するために必要な資質・能力を身に付けられるよう、初等中等教育段階最後の教育機関として、

- ・ 高等教育機関や実社会との接続機能を果たしていること
- ・ 生徒が自立した学習者として自己の将来のイメージを持ち、高い学習意欲を持って学びに向かっていること
- ・ 多様な生徒一人一人に応じた探究的な学びが実現されるとともに、STEAM教育などの実社会での課題解決に生かしていくための教科等横断的な学びが提供されていること

などが掲げられ、スクール・ミッションの再定義やスクール・ポリシーの策定等が提言された。

スライド 16

I. これからの高等学校の在り方に係る基本的な考え方

○ …平成28年に選挙権年齢、令和4年に成年年齢が引き下げられ、生徒が高等学校在学中に成年に達して「大人」となり、親の同意を得ずとも、自身の意思決定で様々なことが可能となる権利と責任を有するようになった。これに伴い、高等学校の役割として、自己決定を行い、自分の人生をより良いものへと切り拓いていくことのできる自立した市民として、より良い社会の実現に主体的に参画しようとする資質・能力を育成することが一層強く期待されることとなっている。

○ こうした動きは、生徒が学校で学ぶことと自己の将来とのつながりを見通しながら、社会的・職業的自立に向けて必要な基盤となる資質・能力について、特別活動を要しつつ各教科・科目等の特質に応じて育むことを目指すキャリア教育とも、その方向性は同じであり、一人一人の生徒のキャリア発達を促すことが高等学校教育において一層求められる状況にあると捉えることもできる。

○ …学習指導要領が掲げる理念の各高等学校への一層の浸透・定着を図りつつ、これからの教育課程の在り方として、「総合的な探究の時間」を教育課程の基軸に据えながら、各教科・科目等の相互の関連を図る中で高等学校生活全体での学びの充実を図ることが今後特に重要である。

スライド 17

II. 各論点に対する現状・課題認識と具体的方策

3. 社会に開かれた教育課程の実現、探究・文理横断・実践的な学びの推進：全ての生徒の学びの充実に向けて

(学習指導要領の理解や着実な実施、教育課程の在り方)

○ …総合的な探究の時間について、高等学校学習指導要領で示されている理念等が正しく理解されていなかったり、大学入学者選抜の出題教科・科目の学習が中心となっているために意欲的に取り組まれていなかったりすることの指摘がある。このため、学習指導要領の理念や趣旨の一層の浸透・定着を図るための取組を進める必要がある。

○ …総合的な探究の時間を中心とした探究活動を、学校側や他者から与えられたテーマに関する調べ学習に陥らせず、生徒の主体性や興味・関心を十分に引き出しながら、「自己の在り方生き方を考えながら、よりよく課題を発見し解決していくための資質・能力を育成する」という目標の達成に、着実につなげていく必要がある。このような生徒の姿を実現していくに当たっては、中学校までの総合的な学習の時間での探究的な学習との違いを意識し、生徒が取り組む探究をより洗練された質の高いものとしていくことが求められる。質の高い探究

スライド 18

とは、探究の過程が高度化することと、探究が自律的に行われるということであり、その実現のための支援も必要である。こうした考え方の下、生徒が探究の見方・考え方を働かせながら、総合的な探究の時間を中心とした探究活動に取り組むことを通じて、自律的な学び手となり、そして、これからの社会の創り手としての自覚を涵養することが期待される。

○ …学習指導要領の理念の各高等学校への一層の浸透・定着を図りつつ、これからの教育課程の在り方として、

- ・ 生徒が自己の在り方生き方を考え、主体的に社会に関わったり、自ら学びを調整したり自己決定したりする場面を積極的に取り入れていくこと
- ・ 生徒が各教科等の学びで習得した資質・能力を相互に関連付け、生かしながら、実りある探究活動を進めることができるよう、「総合的な探究の時間」を教育課程の基軸に据えてカリキュラム・マネジメントを行い、各教科・科目との相互作用を強めていくこと

等により、各教科等における学びの充実を図ることが今後特に必要である。

スライド 19

(社会の変化に対応した高等学校教育の実現に向けて)

○ これからの日本社会の在り様が大きく変化していくことが指摘されている中、教育界全体の構造改革が求められており、産業界からも、学校において探究的な学びや文理横断型のリベラルアーツ教育を行っていくことが期待されている。高等学校においてこれに代えて探究・文理横断・実践的な学びの充実を図っていく際、高等学校段階までに身に付けた力を大学で発展・向上させるという高大接続の趣旨から、今後も、大学入学者選抜の改善について一体的に取り組んでいく必要がある。これまでに実施してきている「学力の3要素」を多面的・総合的に評価する大学入学共通テストの実施や、各大学が実施する個別選抜の改善等について、引き続き取り組んでいくべきである。

スライド 20

<具体的方策> (大学入学者選抜を含む高大接続改革の推進)

○ 大学入学者選抜において、入学志願者の思考力・判断力・表現力等を適切に評価するなど、学力の3要素の多面的・総合的な評価への速やかな改善を促す…取組を進めるべきである。大学・学部のアドミッション・ポリシーに基づき、入学後の学修に必要な能力・適性等をできるだけ正確に判定することができるよう、大学入学者選抜の在り方を適切に見直す必要がある…。その際、文理横断的な学びを進める観点から、高等学校段階における取組と併せて、アドミッション・ポリシーを踏まえて、人文・社会科学系における理系科目や、自然科学系における文系科目の設定といった、大学入学者選抜における出題科目の見直し等も促進する必要がある。また、高等学校までの探究学習や学校内外で意欲的に取り組んだ活動等により得られた学習成果を各大学の個別入試の評価に活用することを促進するとともに、高等学校段階からの大学の教育課程の先取り履修、当該先取り履修の大学入学後の単位認定、大学と連携した探究活動など、高等学校教育と大学教育の連携を推進していくことも重要である。

○ さらに、こうした取組等も踏まえ、大学と高等学校との架け橋となる大学入学者選抜を含む高大接続改革に関して、これからの時代に求められる在り方について、大学・高等学校の関係者を含めた議論を進めていくことが重要である。

スライド 21

高校から大学・大学院まで一貫通貫した人材育成システム改革

● 人材育成システム改革推進タスクフォース(第1回)開催

11月12日(水曜日)  
教育、科学技術・学術、スポーツ、文化

11月12日、日本成長戦略本部における高市総理からの「未来成長分野」による挑戦する人材育成に関して検討するようこの指示を受けたことも踏まえ「人材育成システム改革推進タスクフォース」を設置し、第1回を開催しました。

本タスクフォースは、

- ① 高校教育の振興について(「高校教育改革グランドデザイン(仮称)」の策定含む)
- ② 「短の総和」管中等を踏まえた高等教育の改革について
- ③ 産学が連携したリ・スキリング・エコシステムの構築について
- ④ 「新技術立国」を担う科学技術人材育成・環境整備について
- ⑤ 文化・スポーツへの成長投資について

等を省全体で同じ課題意識を持ち運動しながら議論し、高校から大学・大学院まで一貫通貫した人材育成システム改革に向けたビジョンの策定を行います。

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/activity/detail/2025/20251112.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2025/20251112.html)

スライド 22

文部科学省 人材育成システム改革推進タスクフォース  
「高校教育改革に関するグランドデザイン2040(仮称)」に向けて  
11月28日  
骨子公表

高校教育改革に関する基本方針(グランドデザイン(仮称)) 骨子  
～2040年に向けたN-E X.T.(ネクスト)ハイスクール構想～

1. グランドデザインの背景  
(社会状況の大きな変化「2040年問題」)

- ・2040年には、少子高齢化、生産年齢人口の減少、地方の過疎化が一層深刻化。産業構造や社会システムの変化を踏まえた労働力供給ギャップ、理系人材の不足の可能性。
- ・高校生が学校で「自ら問いを立てる力」「他者と共に価値を作り出す力」等を身に付け、希望する大学等への進学や就職等をし、生涯を通じて幸福に暮らしていくことができるよう、以下3つの視点の下で高校改革に取り組むとともに、高校から大学・大学院に至るまでの一貫した教育改革により、強い経済や地域社会の基盤となる人材育成を実現。

<視点1>不確実な時代を自立して生きていく主権者として、AIに代替されない能力や個性の伸長

<視点2>我が国の経済・社会の発展を支える人材育成

<視点3>一人一人の多様な学習ニーズに対応した教育機会・アクセスの確保

スライド 23

(2) <視点2> 我が国の社会・経済の発展を支える人材育成

- ・2040年には、いわゆる文系人材の余剰、いわゆる理系人材の不足、地域の経済社会を支えるエッセンシャルワーカーの圧倒的不足が懸念。産業イノベーション人材育成の必要。グローバル化も進展する中、こうした人材への国際的な資質・能力の涵養や、世界で活躍できる人材の育成も重要。
- ・AI等によって社会全体が大きく変わり、従来の進路選択の見方が必ずしも妥当しなくなりつつあるとの危機意識を共有し、進学希望者の理解、保護者や学校関係者の意識改革が必要。
- ・新時代を担う人材を育成するための高校の特色化・魅力化が必要。

スライド 24

(実現するための取組の方向性)

- ・理数系やDX・AIに関する関心の向上、探究・文理横断・実践的な学び、Society5.0に対応したSTEAM教育、専門高校における地域の産業界との連携等に向けた指導運営体制の充実。
- ・理数・デジタルや文系的素養、DX・AIを使いこなす情報活用能力を身に付けた上で、社会で活躍するロールモデルを生徒自身が感じながら学ぶことができる環境の構築。
- ・普通科に偏った学科構成の見直しや産業界の伴走支援による専門高校の機能強化・高度化等の取組と、大学教育における理工・デジタル系人材育成の強化等の取組を有機的に連携・連動。
- ・国内外の大学・高校等とも連携しながら、社会的課題の解決に向きあう学びや、留学生の派遣や受け入れを通じたグローバル人材の育成。

スライド 25

**「科学の再興」に関する有識者会議「科学の再興に向けて 提言」**

【提言の目的】  
 ① 大学研究の質・数量の向上と社会実装の促進  
 ② 産学連携の強化と社会実装の促進  
 ③ 国際的な競争力の向上と社会実装の促進

2025年11月18日

【科学の再興】  
 ① 日本に、世界を驚かすような傑出した研究が存在する。科学を再興し、科学を基盤として我が国の将来を切り拓く

【科学の再興】  
 ① 新たな「知」を生み出し、社会に還元する。② 産学連携の強化と社会実装の促進

【提言の目的】  
 ① 産学連携の強化と社会実装の促進  
 ② 国際的な競争力の向上と社会実装の促進

【提言の目的】  
 ① 産学連携の強化と社会実装の促進  
 ② 国際的な競争力の向上と社会実装の促進

【提言の目的】  
 ① 産学連携の強化と社会実装の促進  
 ② 国際的な競争力の向上と社会実装の促進

スライド 26

**フォーラム趣旨**

●一方、日本学術会議は2023年の分科会報告※で、高大接続が教育内容や選抜方法、学習者の社会的属性などによって細分化し、多様な接続が並存する「セグメント化」した状況にあるとし、この進行は高大双方の「教育のコア」の喪失、さらに社会的格差拡大につながりかねず、高大の「教育接続」の在り方の検討を求めている。

※日本学術会議 心理学・教育学委員会 高大接続を考える分科会（2023年9月）  
 報告「日本における高大接続の課題—「セグメント化」している現状を踏まえて—」

スライド 27

**日本における高大接続の課題**

「セグメント化」している現状を踏まえて—

【高大接続】とは、高校と大学を区切ること（非連続性）とつなぐこと（連続性）の両面をもちつづ、学習者の移行を促すことを意味する。

【高大連携】は、「高校と大学の連携による、高校教育及び大学教育の改善充実に資する取り組み」であり、高校から大学への学習者の移行という時間軸は含まない。

接続という問題領域は、入試等の構造的側面、カリキュラムや教育方法等の内容的側面、ガイダンスや情報交換等の運営的側面の3つに分けることができる。

従来の高大接続に関する研究や議論では、構造的側面、とりわけ入試（入学者選抜）に大きな関心が寄せられてきたが、今日の高大接続を考えるうえでは、「教育接続」を軸に据える必要がある。教育接続とは、入学者選抜の一点にとどまらず、高校と大学とを教育内容・方法や学力・能力等において多面的に接続させることを意味する。

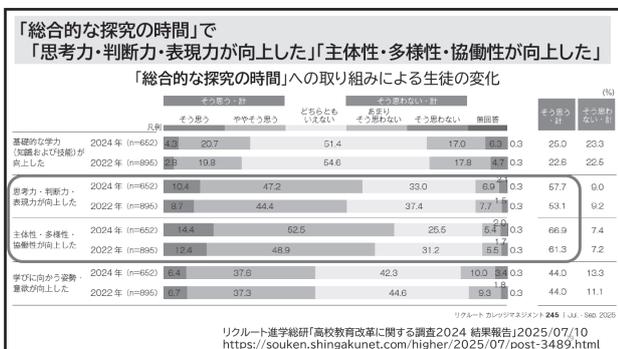
日本の場合、…高校と大学の関係は、教科とディシプリン（discipline、学問分野）がうまく対応づけられているにとどまり、高大接続を教育接続として捉える視点が弱かった。

スライド 28

（高校教育、大学教育、大学入学者選抜それぞれの一引用者）セグメント化自体を避けられない前提として捉えるか、克服すべき問題状況として捉えるかについては意見が分かれるところだが、少なくとも現状理解において、高校・大学・大学入学者選抜を均質なイメージでとらえ、画一的なシステムの導入を目指すことは現実に対応していない。実際には、高校教育、大学教育、両者をつなぐ大学入学者選抜、この三者それぞれの多様化が進むなか、三者のセグメント化が掛け合わされる複雑さがある。そして、この現状を放置すれば、高校教育、大学教育のコアが喪失するとともに、そうしたセグメント化した教育を受ける学習者間の社会的な格差の拡大にもつながることが懸念される。なぜならば、セグメント化には多様な社会的属性が関連しており、セグメント化の進行は社会的格差拡大をもたらす、結果的に教育を通じた社会的再生産が強化されることが懸念されるからである。こうした懸念が現実にならないための方策が求められよう。

…本報告が提示した高大の教育接続を考える見取り図を参照しつつ、高校側が修了時にどのような生徒を育成したいのか、大学側が入学者にどのような資質・能力を求めるのか、大学教育についてはどのような改革が求められるのかなど、関連する分野間での教育接続に関するボトムアップ的な協議を重ね、それにもとづき、全体としてのわが国の高大の教育接続の在り方を検討することが必要と考える。

スライド 29



スライド 30

**溝上 慎一 氏（桐蔭学園理事長、桐蔭横浜大学教授）**

●まず、大切なことは、**将来の見通し**を持ってないまま、大学進学をさせることはできるだけ避けてほしいということです。高校で**将来の見通し**を持ってない人は、大学に進学した後も見通しを持ってないまま多いことが多いのです。…

●もう一つは、高校における「総合的な探究の時間」の重要性です。時間をかけて問いを立てて考えることは、大学でもプロジェクト学習を推進するなど力を入れています。私は探究学習が、高大接続を力強く媒介する役割を担うと考えています。探究学習を通して、主体的・対話的で深い学び（AL）とキャリア教育を一層充実させることが、高校生、大学生の成長には欠かせないものになってくると思います。…

溝上慎一「将来の見通しを持った大学進学が極めて重要 高校の探究学習が高大接続を力強く媒介する」  
 河合塾「学校と社会をつなぐ調査から見ること」『Kawaiijuku Report』2023年7-8月号、pp.39-43

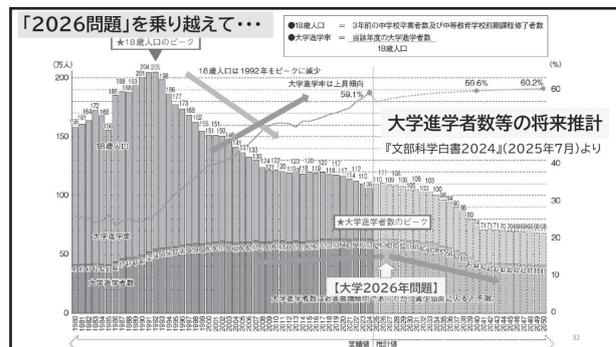
## スライド 31

とはいえ、不安や困難さ—「モヤモヤ」感が払拭できない

- 探究活動への動機付けをどうすればよいか、わからない
- 探究の過程をどのように指導すればよいか、わからない
- 「問いを立てる」「課題の設定」時の指導が困難に感じる
- 探究活動と「調べ学習」との違いがわからない
- 探究活動をどのように評価したらよいか、わからない
- 負担が多い一方で、何に役に立つのか、進路選択につながるか、がわからない
- 探究活動に対する教員間の意識の差が大きい
- 思考力・判断力・表現力等や主体的に学習に向かう態度(学びに向かう力・人間性)を入学者選抜時にどのようにはかられているのか/どのようにはかればよいか

(参照)探究学習研究会編著「探究学習」というけれど一学びの「今」に向き合う—晃洋書房、2024年

## スライド 32



## スライド 33

フォーラム趣旨

- 今回のフォーラムでは、探究的な学びが実践、展開される中、あらためて高校と大学の連携はどうあるべきか、その理想と現実が生じている課題との間で高大双方が抱える「モヤモヤ」を解きほぐしたい。高大接続との違いも含め、高大関係者の共通理解を深めながら、探究的な学びをめぐる高大連携のこれからの可能性を探る機会とする。

## スライド 34

第1部 基調講演 & パネルディスカッション

第2部 4つの分科会

そして、、、情報交換会

今日一日、広く深く学び、モヤモヤを解消しましょう